

## 「研究フィールド×理論」が紡ぎ出すもの： 「脱ボランティア日記」化のためのフィールドレポート

山口 洋典

(総合政策科学研究科 准教授)

### はじめに

唐突だが、フィールドワークは料理に似ていると説明することがある。さしずめ、フィールドで食材を得る、と表現するなら、研究者はその食材をどう調理するか、一級の料理人である必要がある。食材の味を生かす「生野菜サラダ」のようなレシピもあれば、厳密な調理法に基づくこともあれば、盛りつけで魅せることもある。そこで本報告では、筆者は自らが携わっている活動を、どのような観点から実践的研究の事例として取り上げようとしているのか、4つの「食材と調理法」すなわち「研究フィールドと理論」を述べることにする。

### (1) 應典院×協働想起

同志社大学大学院に着任以来、届け出の上で兼職しているのが、浄土宗應典院の主幹という立場だ。自治体等では馴染みのある主幹という肩書きも、お寺の世界で用いているのは、東京にある青松寺の獅子吼林サンガだけではないか。ともあれ、青松寺でも應典院でも、ご葬儀や法要等の葬送儀礼への執務が主幹の本務ではない点は同じである。主幹には、お寺が社会に果たすべき機能を追究するという使命のもと、事業のプロデューサーや組織のディレクターという立場が求められるのだ。

筆者が2006年4月に應典院の二代目主幹に着任して以来、各種の取り組みの根底に据えているのは「協働想起」という観点である。これは、グループ・ダイナミックスの観点から、何らかの協働の場において紡ぎ出される語りによって

「ある集合体のメンバーに再びなる」(渥美, 2003, p.148) からこそ記憶は伝承されていくという考え方だ。すなわち、記憶は個人の脳の中にあるもの(memory)というコンピュータメタファーではなく、ある場において何らかの出来事を思い起こしたという行為(remembering)の結実として捉えられるべきではないか、という理論的アプローチである。この考えを携え、2006年10月には看取りに関する演劇と公演(第45回寺子屋トーク「看取り文化の新しいデザイン」)、2007年2月から3月には生前の遺影撮影と展示(大阪・アート・カレイドスコープ2007公募作家展示「ノッキング・オン・ヘブンズ・ドア」)、2007年10月には朝日新聞に連載された遺影とインタビュー内容の展示(野寺夕子写真展「遺影、撮ります」)、そして2008年3月には小児悪性腫瘍で17歳にて亡くなった患児が遺した写真展と法要(「好奇心星人の挑戦」森木忠相写真展)を開催し、新しい供養のかたちを模索している。

### (2) 應典院寺町倶楽部×ソーシャルアート

前項では、應典院の宗教法人としての可能性を追究しているということに触れたが、宗教空間をいかに活用するかという立場で携わっているのが、應典院寺町倶楽部というNPOの事務局長という役割である。應典院寺町倶楽部は、應典院に事務局を置き、檀家制度を前提としないお寺において実施される各種の事業を主催している。法人格は有していないものの、広く会員を募り、市民に開かれたお寺の実現を導くための応援団として会員が組織化されている。寺子

屋、駆け込み寺、門前町、そうしたことばに見られる、教育、福祉、まちづくりといった機能を再びお寺に実装しようという取り組みとあわせて、勸進興行などに見られる芸術文化に関する事業も活発に行われている。

とりわけ、應典院寺町倶楽部による芸術文化事業は、「作品づくりと並走しながら大衆（オーディエンス）を巻きこんでいくダイナミックな社会づくり」という「ソーシャルアート」の実践であると捉えている（プラクティカネットワーク, 2005）。應典院寺町倶楽部において、現在最も大きな位置を占める芸術文化事業は、2006年より4年度にわたって受託した、大阪市現代芸術創造事業による「アトリソースセンター by Outenin（愛称：築港ARC）」の取り組みである。政教分離という原理原則もあるゆえに、お寺が自治体の事業を直接担うことは困難である。しかし、法人格を持たずとも、活動の蓄積と革新的な発想があれば公の事業の担い手になることができることを應典院寺町倶楽部の取り組みを通じて確認したところであり、今後20代の若手スタッフ5名がどんな創意工夫を紡ぎ出し続けていくかに関心を向けていきたい。

### (3) 京都府国際課インドネシアプロジェクト×産業復興

同志社大学の教員として参画することになった最初の事業が「インドネシアジャワ島地震復興支援プロジェクト」であった。既に概要は、山口(2007)でもまとめたところである。しかし、原稿執筆後も、プロジェクトは継続している。2006年度までは技術交流を中心にしていたのに対し、2007年度には伝統産地の復興協力のために、産業、まちづくり、コミュニティ・ネットワーク形成について、意見交換を重ねた。具体的には、京都大学大学院工学研究科の神吉紀世子准教授及び立命館大学理工学部の八木康夫准教授と共に研究会が開催されてきた。

そんななか、筆者は「産業復興」という視点で、被災地の今後を見据えようとしている。これは、徳島県上勝町の「産業福祉」（横石, 2007, p.196）の概念を借りたものだ。つまり、補助金に頼るのではなく産業の力で再生しようという投げかけである。そこで、仕事が生きがいになれば被

災地で暮らす人々が地域に対して愛着を深めるのではないかと考え、パティック（ろうけつ染め）を利用した匂い袋の販売、流通のシステムを構築、運用することで、継続した生地の発注ができないかと、事業モデルを模索しているところだ。

### (4) 京丹波プロジェクト×大学発コミュニティ・ベンチャー

應典院に着任し、同志社大学を兼務するまで、筆者は財団法人大学コンソーシアム京都にて、産官学地域の連携による教育・研究事業を担当した。実際、NPO分野のインターンシップの制度化を皮切りに、京都起業家学校の開校、リエゾン・オフィスの設置、京都学術共同研究機構の設立、政策系大学・大学院研究交流大会の開催など、常に新規事業を担当してきた。そうした経験を評価していただいたのか、同志社大学のリエゾンオフィスならびに特定非営利活動法人同志社産官学連携支援ネットワークによる、「京丹波プロジェクト」（例えば、西村, 2008）の検討段階から委員長を務める機会を得た。

本プロジェクトには、京都府地域力再生プロジェクト支援事業の採択により、最長3年の助成を得て、「食」に着目した地域活性化のあり方を模索しているが、一方で大学が積極的に携わることの必然性を語るにあたり「コミュニティ・ベンチャー」ということばに着目している。なぜなら、経済産業省による「新市場・雇用創出に向けた重点プラン」（2001年）で示された「大学発ベンチャー1000社計画」などに象徴されるように、よりよい社会を導くために大学には創造的、革新的な知が求められているため、今こそ、コミュニティに対して創造的、革新的な知が必要とされているのではないかと考えるためである。その際、重要となるのは、人々が「知識を肥やす」のではなく、原（2003）が示す「認識を肥やす」ことではないかと考えている。そのために、ソーシャル・イノベーション研究コースの教員・院生等と共に、京丹波プロジェクトの充実を図り、コミュニティをよりよい方向にデザインするモデルの創造に愚直にあたりたいと発意する。

## おわりに

以上、筆者の研究における4つの活動について、研究としての活動と捉えられるよう、理論的観点を重ねて報告した。それぞれ詳述はできていないが、(1) 少子高齢社会を反映した多死社会における看取りと見送りと供養の連続性の担保、(2) 自治体文化政策の担い手と展開方法の検討、(3) 姉妹都市関係を活かした災害救援から復興活動の実現、(4) 大学の社会的責任の遂行、こうした具体的な公共問題を筆者自身がソーシャル・イノベーターの一人となって解決する実践の報告である。料理で言えば小鉢料理や単品料理のようで、しかもその料理の提示の仕方も試食コーナーのようになってしまったかもしれないが、それも今後、料理人として個々の食材や調理法を自らのものとして懐石やコース料理を組み立ていく上では重要で必要な過程を通過している途上にあることを実感した。すなわち、活動報告やフィールドレポートは、フィールドワークの成果が「ボランティア日記」(山口, 2007, p.3) にとどまることないよう、他者にフィールドの意義を伝える上ではどのような物語を組み立てるべきかを検討する機会なのであって、研究者としてその活動を

う料理していくのか、今後の論説や研究ノートへの示唆を見いだしてこそ意義があることを確認した次第である。

## 引用文献

- 渥美公秀「記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス」『大阪大学21世紀COEプログラム・インターフェイスの人文学2002・2003年度報告書 7. 臨床と対話』、2003年、146-160ページ。
- プラクティカネットワーク『アートという戦場: ソーシャルアート入門』フィルムアート社、2005年。
- 原研哉『デザインのデザイン』岩波書店、2003年。
- 西村和代「地域の活力を生み出す農畜産品ブランド化と食文化の発信へー京丹波プロジェクト「1年目の挑戦」」『同志社政策科学研究』第10巻(第1号)、同志社大学大学院総合政策科学会、2008年、233-236ページ。
- 山口洋典「ソーシャル・イノベーション研究におけるフィールドワークの視座ーグループ・ダイナミックスの観点からー」『同志社政策科学研究』第9巻(第1号)、同志社大学大学院総合政策科学会、2007年、1-21ページ。
- 横石知二『そうだ、葉っぱを売ろう!: 過疎の町、どん底からの再生』ソフトバンククリエイティブ、2007年。